ブラジル日系・近郊農村地域における言語シフト
――スザノ市福博村における言語使用の世代的推移――

中東　靖恵*

1．はじめに

ブラジルにおける日系総人口は現在約140万人、世界最大の日系人コミュニティを形成する。ブラジルへの移住が開始されたのは1908年のことだが、戦前期には約19万人、戦後期には約5万5000人が移住した。戦後、1960年をピークに移住者数は減り始め、1982年以降100人台を下回り、実質上、移民の時代は終わりを告げた。そして1985年ごろからは、いわゆる「デカセギ(dekassegui)」現象が始まり、ブラジル経済の長期低迷や1990年の出入国管理及び難民認定法の一部改正などにより、在日ブラジル人の数が急増、現在では28万人を超え、今なお増え続けている[1]。

ブラジル移住開始から約100年、ブラジル日系社会では日系人口が激減、少子・高齢化が激しく、コミュニティの衰退が危惧されている。いまやコミュニティメンバーの中心はブラジル生まれの2世、3世であり、生活言語としての日本語は徐々にポルトガル語へと交代しつつある。ブラジル社会において日本人移民たちはどのような言語生活を送り、そこでの日本語はどのように変容してきたのか、そのような言語実態についてはまだ不明な点が多く、その解明は急がれる課題である。

本稿では、2002年～2003年にかけ、サンパウロ州日系奥地農村地域ミランドポリス市アリアンサ移住地と、同州日系近郊農村地域スザノ市福博村で行った言語生活調査[2]のうち、スザノ市福博村におけるドメイン別言語使用について世代的推移に焦点を当て分析を行う。なお、調査の立案・実施などの詳細と調査データについては、既刊報告書（工藤編著2003、2004）を参照されたい。

2．調査の概要

2.1　調査地点の概要

スザノ市（Suzano）は、サンパウロ市から東に約30～40kmのサンパウロ大都市圏（Grande São

---

* 岡山大学文学部助教授

[1] 森（2000）では、デカセギによるブラジル日系人の移住形態を「還流型移住（circle migrant）」あるいは「トランスマイグラント（transmigrant）」として積極的に位置づけ、一時的滞在でも永住でもないその中間的移住形態によって特徴付けられるのではないかとの興味深い議論を行っている。

[2] 本稿は大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」言語の接触と混交研究班「ブラジル日系社会における言語の総合的研究および記録・保存事業」（事業推進者：工藤眞由美大阪大学大学院文学研究科教授）による研究成果の一部である。筆者は同プロジェクトの共同研究者である。

Paulo)内に位置する。この地に日本人が入植したのは1921年のことだが、1930年以降、奥地の大農場契約労働者（コロノ：colono）であった日本人移民が、借地農・自営農へと転向、サンパウロ市近郊地域に集中的に移動し始め、戦後、スザノ市は日本人移民が最も集中した地域となった。

福博村は、同市南部にある農業地域ヴィラ・イペランジア地区（Vila Ipelândia）の日系集団地の呼称である。1931年、この地区に日本人家族2組が入植したことにより、福博村の歴史は始まった。1935年には「福博日本人会」が創設され、土地開拓や道路整備のほか、子弟教育のための学校建設が行われた。第二次世界大戦中、一旦は解散されたが、戦後「福博村会」として再結成され、1940年代後半から60年代にかけて、新会館とグルッポ（grupo）・日本語学校の校舎建設、村勢実態調査や入植記念慰霊祭などの実践を通して、エスニック地域共同体としての基盤を固めていった。

初期の主要農産物は蔬菜・果樹であり、小規模の家族労働型の農業経営が主であったが、1960年代半ばには養鶏業に移行、ブラジル有数の「養鶏村」に成長した。70年代になると周辺地域に蔬菜栽培農家が集団借地入植し、世帯数214世帯、人口1512人[3]にまで膨れ上がり、村の最盛期を迎えた。だが、80年代以降、若年層人口の都市流出、半農半商型への産業構造の転換、デカセギ、少子・高齢化、治安の悪化などにより村の過疎化が進み、現在、深刻な社会問題となっている。

2.2 インフォーマントの選定

サンパウロ人文科学研究所（2002）の「日系社会実態調査」によると、2001年現在、スザノ市福博村の人口は134世帯、512人[4]である。このうち、15歳以上の人口構成を世代別に示すと表1のようになる[5]。2世が最も多く、全体の約半数を占める。

このうち、非日系を除いた「1世」「2世」「3世以降」という3つのサブグループを世代サンプリングの母集団とし、各世代40人を目安に等間隔抽出を行った。その結果、1世：46人(46.0%)、2世：43人（19.8%）、3世以降：42人（25.5%）で、合計131人（27.2%）が抽出された（括弧内、世代別総人口比率。注4参照）。

表1　15歳以上世代別人口構成

	人	%
1世	100	21.4
2世	217	46.5
3世以降	120	25.7
非日系	22	4.7
その他・無回答	8	1.7
合　計	467	100.0

[3] 1948年から約10年ごとに行われている村勢実態調査(1970年実施)の結果による(サンパウロ人文科学研究所2002)。

[4] 世代別人数と総人口比率は、1世：100人（19.5%）、2世：217人（42.4%）、3世以降：165人（32.2%）、非日系：22人（4.3%）、その他・無回答：8（1.6%）である（サンパウロ人文科学研究所2002)。

[5] ここでは「日本政府方式」で世代算定を行っており、「3世以降」には3世・4世と混血が含まれる。

2.3 調査の方法と調査項目

言語生活調査は、調査票を用いた半構造化インタビューにより行った。調査項目は大きく、(1)社会的属性、(2)言語を中心とした生活史、(3)地域、職場、家庭などドメイン別の言語使用、(4)日本語・ポルトガル語の4技能別能力意識、(5)訪日経験と言語意識、(6)日本語教育意識とポルトガル語教育意識、(7)日本語とポルトガル語を混ぜて使用することに対する意識、に分かれており、各項目について細かな質問項目が設定されている。

2.4 調査の実施

調査は、2003年4月中旬、約1週間の期間に実施された。サンプリングにより抽出された131人のうち、死亡、病気療養中、転出、デカセギ、調査期間中の不在などの事由により、24人が調査不能であったため、追加調査を実施し、最終的にインフォーマントは1世～3世の108人となった。

3. 調査の結果

以下では、インフォーマントの属性として、基礎的情報（性別、年齢、国籍、出身地）のほか、社会経済的側面（配偶者の世代、学歴、職業）、文化的側面（宗教）、日本との関係性（訪日・デカセギ経験、親戚付き合い）についての概略を世代別に述べた後、「家庭」「メディア・娯楽」「地域社会・職場」の各ドメインにおける言語使用の実態を、世代的推移に焦点を当てて分析する。

3.1 インフォーマントの属性

3.1.1 性別

全体では男性：54名（50.0%）、女性：54人（50.0%）である。世代別に見ると、1世：男21人、女18人（計39人）、2世：男19人、女22人（計41人）、3世：男14人、女14人（計28人）となり、男女比は各世代ほぼ半々である。

3.1.2 年齢

世代・年齢別構成人数を示すと表2のようになる。1世では70～80歳代、2世では50～60歳代、3世では20～30歳代が多い。各世代の平均年齢は、1世：71.7歳（SD＝11.84）、2世：52.7歳（SD＝

表2　世代・年代別インフォーマント人数（人）

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	合計
1世	0	0	0	1	9	3	14	12	0	39
2世	0	3	2	9	13	13	1	0	0	41
3世	1	16	7	4	0	0	0	0	0	28
合計	1	19	9	14	22	16	15	12	0	108

12.46)、3世：30.0歳(SD＝8.06)となる。また、インフォーマントの生年は、1世：1913年～1954年生、2世：1931年～1979年生、3世：1954年～1984年生で、1世は39人中、31人が戦前生まれ、8人が戦後生まれ、2世は戦前・戦後生まれが半々、3世は全員が戦後生まれである。

なお、1世には渡航年と移住年齢も尋ねた。39人中、戦前移民は21人で、渡航年は1925年～1936年(1920年代：9人、1930年代：12人)、戦後移民は18人で、渡航年は1955年～1970年(1950年代：9人、1960年代：8人、1970年代：1人)である。戦前移民の移住年齢は2歳～14歳(平均8.6歳、SD＝3.26)で、全員が子供移民である。また、戦後移民の移住年齢は7歳～38歳(15歳未満8人、15歳以上10人）で、比較的年齢の若い者に子供移民が多く見られる[6]。

3.1.3 国籍

1世では、日本国籍：36人、帰化：3人、2世では、ブラジル国籍：36人、二重国籍5人、3世では28人全員がブラジル国籍であった。

3.1.4 出生地

1世については出身都道府県名を尋ねた。地方別に示すと、北海道：3人、東北：4人、中部：6人、関東：4人、近畿：2人、中国：7人、四国：5人、九州：8人であり、全国各地から移住者が集まっていることが分かる。2世以降については、出身の州・郡/市・植民地名を尋ねた。2世では、サンパウロ州出身者が37人、このうちスザノ市出身者は12人で、残りの4人はいずれもサンパウロ州に隣接の州出身者であった[7]。3世では、パラナ州出身者1人を除いた27人がサンパウロ州出身者であり、そのうち22人がスザノ市出身者である。

3.1.5 配偶者の世代

未婚者を除くインフォーマントには配偶者の世代を尋ねた(表3)。どの世代においても同世代間の結婚が多いが、1世では異世代間の結婚も比較的多い[8]。また、2世以降では、1世には見られない非日系人との異民族間結婚も見られる。

表3　配偶者の世代（人）

	配偶者の世代						
	1世	2世	3世	非日系	NR	未婚	合計
1世	22	17	0	0	0	0	39
2世	2	26	1	3	1	8	41
3世	0	7	3	5	0	13	28
合計	24	50	4	8	1	21	108

NR＝無回答

3.1.6 職業

1世では、39人中16人が職業従事者で、このうち12人が農業、4人はフェイランテ（feirante）など商業・販売業である。その他、主婦8人、退職者15

[6] つまり、戦前移民・戦後移民合わせ、1世インフォーマントの約4分の3が子供移民ということになる。

[7] ミナス・ジェライス州2人、南マット・グロッソ州1人、パラナ州1人。

[8] 配偶者世代が1世であると答えた22人のうち、男性は8人、女性は14人、配偶者世代が2世であると答えた17人のうち、男性は13人、女性は4人であり、性比率に偏向性が認められる。

人[9]である。２世では41人中26人が職業従事者で、内訳は農業16人、商業・販売業５人、管理・事務職３人、運輸・通信業１人、専門・技術職１人である。その他、主婦10人、退職者２人、無職２人である（無回答１人）。３世では、28人中23人が職業従事者で、内訳は農業８人、商業・販売業６人、管理・事務職６人、専門・技術職３人である。その他、学生２人、主婦２人、無職１人である。世代が若くなるほど農業従事者の割合が減り、他業種従事者が増えることが分かる[10]。

３．１．７　学歴

学歴については、日本とブラジルのそれぞれについて尋ねた。１世の場合、日本とブラジルの両方に通学経験のある者がいるが、２世・３世では見られなかった。

表４には１世についてのみ、学歴別人数を示した。通学歴が日本のみの者は14人、ブラジルのみの者は５人[11]、日本・ブラジルの両方で通学歴のある者は16人で、いずれの場合も、小・中学校程度の学歴の者が多い。２世では、通学歴なし：０人、小学校：19人、中学校：４人、高等学校：４人、大学：13人（無回答１人）で、小学校程度が最も多いが、高学歴者も１世に比して多くなる。３世では高学歴化がさらに進み、通学歴なし：０人、小学校：２人、中学校：３人、高等学校：４人、大学：19人と、全体の約７割が大学進学者である。

学歴については、学校教育のほか、日本語学校通学歴と、１世には成人後のポルトガル語学習の有無を、２世・３世には成人後の日本語学習の有無について尋ねた。日本語学校の通学歴が「ある」と答えたのは、１世：13人（33.3%）、２世：26人（63.4%）、３世：22人（78.6%）となり、世代が下がるにつれて通学歴の割合が上がる。なお、日本語学校通学歴のある１世は、全員、渡航年齢が10歳以下である。成人後、ポルトガル語を「学習した」と答えた１世は４人（10.3%）、成人後、日本語を「学習した」と答えた２世は６人（14.6%）、３世は５人（17.9%）である。

表４　１世の学歴（人）

		ブラジルの学校					
		通学歴なし	小学校	中学校	高等学校	大学	合計
日本の学校	通学歴なし	1	5	0	0	0	6
	小学校	5	11	2	1	0	19
	中学校	7	1	0	0	0	8
	高等学校	2	1	0	0	0	3
	大学	0	0	0	0	0	0
	NR	2	0	0	0	1	3
合計		17	18	2	1	1	39

３．１．８　宗教

宗教帰属についてまとめると表５

[9] 退職者15人のうち、１人を除いて、元農業従事者である。

[10] ここでの職業分類は、サンパウロ人文科学研究所（1989、2002）に従っている。同（1989）によれば、全国調査の行われた1958年調査（ブラジル日系人実態調査委員会・鈴木悌一編1964）と1988年調査（サンパウロ人文科学研究所1989）の結果を比較すると、この30年の間に日系人の農業従事者は激減し（1958年：55.9%、1988年：11.75%）、管理・事務職、専門・技術職の割合が大幅に増えているという。

[11] 日本での通学歴のない６人は皆、５歳以下で渡伯した戦前幼少移民である。

のようになる（複数回答あり）。1世ではほとんどが「仏教」徒である。しかし、2世、3世では仏教徒は徐々に減り、ブラジルで最もポピュラーな「カトリック」教徒が優勢となる。また、2世・3世では宗教が「ない」という回答が増えることも特徴的である[12]。

表5　宗教帰属（人）

	仏教	カトリック	プロテスタント	日系新宗教	その他	なし	合計
1世	31	2	1	3	1	3	41
2世	16	17	0	2	0	9	44
3世	8	15	0	0	0	7	30
合計	55	34	1	5	1	19	115

3.1.9 訪日・デカセギ経験と親戚付き合い

訪日経験が「ある」と答えたのは、1世：25人（64.1%）、2世：12人（29.3%）、3世：9人（32.1%）で、1世に比して2世・3世では訪日経験者は少ない。訪問目的は、1世で「親戚訪問」「観光」が多いが、2世では「親族訪問」のほか「留学・研修」「デカセギ」、3世では1人を除き「デカセギ」と答えている。デカセギ経験者の割合は2世（4人：9.8%）よりも3世（8人：28.6%）で増える。

デカセギ以外で日本の親戚と付き合いがあるかどうか尋ねたところ、親戚付き合いが「ある」と答えたのは1世：20人（51.3%）、2世：9人（22.0%）、3世：2人（7.1%）であった。世代が下がるにつれ、訪日経験が減少し、親戚付き合いも少なくなる一方、デカセギ経験者は増えている。

3.2 家庭における言語使用

家庭での言語使用については、次の3つの質問項目を設定し、選択肢（日本語のみ・日本語のほうが多い・日本語とポルトガル語が半々・ポルトガル語のほうが多い・ポルトガル語のみ）の中から選んでもらった。

(1)　夕食の席など家族全員が揃う時に使用する言語

(2)　家族に話しかける時に使用する言語

(3)　家族に話しかけられる時に使用される言語

(2)　(3)については、家族として、「祖父/祖母」「父/母」「夫/妻」「子供」「孫」「兄弟姉妹」「婿/嫁」を挙げ、同居している家族について回答を求めた。

[12] ブラジルでは、近年、宗教の多様化とともに、複数の宗教を信仰する人口と無宗教者の増加が顕著になってきているという（ブラジル日本商工会議所編2005）。

３．２．１　家族全員が揃う時の言語使用

まず、家族全員が揃う時の言語使用の結果を示す。表６は、５つの選択肢のうち、「日本語のみ」と「日本語のほうが多い」、「ポルトガル語のみ」と「ポルトガル語のほうが多い」の回答数を合算し、世代別にクロス集計したものである。

表６より、日本語使用が優勢な１世から[13]、２世・３世へと徐々に、ポルトガル語使用が優勢になっていくことが分かる。各言語使用の割合が世代によって異なるのかどうかについてカイ２乗検定を行ったところ、有意差が認められた（$\chi^2(4)=35.033$、$p<.01$）。

３．２．２　家族に対して話しかける・家族から話しかけられる際の言語使用

家族に対して話しかける、あるいは家族から話しかけられる際の言語使用については、同居家族に限定したため、回答にばらつきがある。そこで、比較的回答数の多い夫婦間と子供との言語使用についてのみ表にまとめた。表７～10（算出方法は表６と同じ）を見られたい。

夫婦間の言語使用（表７、８）では、話し

表６　家族が揃う時の言語使用（人）

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
１世	25	9	3	2	39
２世	11	11	18	1	41
３世	3	4	21	0	28
合計	39	24	42	3	108

NR＝無回答

表７　夫婦間言語使用（話しかける時）（人）

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
１世	23	3	3	10	39
２世	12	7	10	12	41
３世	1	0	11	16	28
合計	36	10	24	38	108

NR＝無回答

表８　夫婦間言語使用（話しかけられる時）（人）

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
１世	23	5	1	10	39
２世	13	5	11	12	41
３世	1	0	11	16	28
合計	37	10	23	38	108

NR＝無回答

表９　子供との言語使用（話しかける時）（人）

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
１世	19	5	2	14	40
２世	3	5	21	15	44
３世	1	0	10	17	28
合計	23	10	33	46	112

NR＝無回答

表10　子供との言語使用（話しかけられる時）（人）

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
１世	17	4	5	14	40
２世	3	3	24	15	45
３世	1	0	10	17	28
合計	21	7	39	46	113

NR＝無回答

[13] 家族が揃う時の言語使用において「日本語とポルトガル語が半々」「ポルトガル語のほうが多い」と答えた１世インフォーマントは、比較的年齢の若い者に多い。

かける場合も話しかけられる場合も、日本語の優勢な1世から[14]、日本語とポルトガル語併用の2世、ポルトガル語優勢の3世へという世代的推移を見せる。各言語使用の割合が世代によって異なるかカイ2乗検定を行ったところ、両者とも有意差が認められた(話しかける場合：$\chi^2(4)=29.659$、$p<.01$、話しかけられる場合：$\chi^2(4)=31.255$、$p<.01$)。なお、1世では配偶者が2世のケースも比較的多いが、配偶者の世代の違いは夫婦間の言語使用の違いに特に影響していなかった。

子供との言語使用では（表9、10：複数回答あり[15]）、夫婦間の言語使用と同様、日本語の優勢な1世からポルトガル語の優勢な3世へという世代的推移を見せるが、夫婦間の場合のように漸次移行するというよりも、日本語中心の1世とポルトガル語中心の2世・3世との間で顕著な違いがある。各言語使用の割合が世代によって異なるのかどうかカイ2乗検定を行ったところ、有意差が認められた(話しかける場合：$\chi^2(4)=35.933$、$p<.01$、話しかけられる場合：$\chi^2(4)=28.726$、$p<.01$)。

なお、1世の場合、子供より下の世代である孫との言語使用において、話しかける場合には日本語を使用しても、孫から話しかけられる場合にはポルトガル語が多くなる。これとは逆に、自分より上の世代である父母との言語使用について見ると、2世では話しかける場合も話しかけられる場合も日本語のほうが多いが、3世では両者ともポルトガル語のほうが多い。また、2世・3世ともに、父母に話しかける場合と話しかけられる場合とでは、前者のほうがポルトガル語の使用が多い。

以上をまとめると、家庭内における言語使用において、1世では日本語、3世はポルトガル語を主として用いるが、両者を併用する2世では自分より下の世代にはポルトガル語、上の世代には日本語をより多く用いる傾向があると言える。

3.3 メディア・娯楽における言語使用

メディア・娯楽における言語使用については、以下の質問項目を設定した。

(1) 新聞・雑誌の定期購読
(2) NHK 海外放送の受信
(3) NHK 海外放送の視聴
(4) 日本のビデオの視聴
(5) ブラジルのテレビ番組の視聴
(6) ブラジルの日系テレビ番組の視聴
(7) NHK 短波ラジオ・日系ラジオの聴取
(8) 日本語の新聞の購読
(9) ポルトガル語の新聞の購読
(10) 日本の歌の聴取
(11) カラオケ

---

[14] 夫婦間言語使用において「日本語とポルトガル語が半々」「ポルトガル語のほうが多い」と答えた1世インフォーマントは、比較的年齢の若い者に多い。これは家族が揃う時の言語使用と同様である。

[15] 複数回答した2世のインフォーマントの一人は、子供でも長男と次男とでは言語使用が異なると答えている。

3.3.1 新聞・雑誌の定期購読

(1) 新聞・雑誌の定期購読については、定期購読の有無と購読新聞・雑誌の言語を尋ねた。雑誌の定期購読者はわずかであった[16]ため、新聞定期購読者の結果のみを表11に示す。

表11　定期購読新聞の使用言語（人）

	日本語	日・ポ語	ポルトガル語	合計
1世	15	11	4	30
2世	4	5	11	20
3世	3	2	12	17
合計	22	18	27	67

1世では日本語の新聞のみの定期購読者が多いが、2世、3世ではポルトガル語の新聞のみの購読者が多くなる。なお、1世では日本語の新聞のほか、ポルトガル語の新聞も併せて購読している者が比較的多いこと、また、新聞定期購読者の割合が2世・3世に比べて高い[17]ことも特徴的である。

3.3.2 NHK 海外放送の受信

(2) 自宅でのNHK海外放送の受信について尋ねた結果、1世では「受信できる」18人（46.2%）、「受信できない」21人（53.8%）、2世では「受信できる」14人（34.1%）、「受信できない」27人（65.9%）、3世では「受信できる」10人（35.7%）、「受信できない」18人（64.3%）で、1世に比して2世・3世で若干「受信できない」割合が高いものの、世代間の差はあまりない。受信の有無の割合が世代によって異なるかカイ2乗検定を行った結果、有意差は認められなかった（$\chi^2(2)=1.373$、n.s.）。

3.3.3 メディアの視聴・購読頻度

(3)～(11)については、選択肢（よくする・ときどきする・ほとんどしない・まったくしない・そのものがない）の中から選んでもらった。紙幅の都合上、数値の詳細は省略し、メディアの視聴・購読の頻度に世代差が見られるかクラスカル・ウォリス検定を行った結果を項目ごとに述べる。

(3) NHK 海外放送の視聴については、前述の通り、受信の有無という点では世代差が認められなかったが、視聴の頻度でも世代差は認められなかった（$\chi^2(2)=5.762$、n.s.）。どの世代でも「NHK放送を見ることができない」という回答が多い。

(4) 日本のビデオの視聴については世代間に有意差が認められ（$\chi^2(2)=21.039$、$p<.01$）、多重比較の結果、視聴の多い1世と視聴の少ない2世・3世の間で世代差が認められた。

(5) ブラジルのテレビ番組の視聴は、どの世代でも「よく見る」の回答が多く、世代間の差はない（$\chi^2(2)=4.063$、n.s.）。

(6) ブラジルの日系テレビ番組の視聴についても世代差はなく（$\chi^2(2)=2.202$、n.s.）、どの世代で

[16] 雑誌定期購読者数（括弧内：雑誌の使用言語の内訳）は、1世：5人（日本語4人、ポルトガル語1人）、2世：6人（日本語3人、ポルトガル語3人）、3世：2人（ポルトガル語2人）であった。人数は少ないものの、日本語からポルトガル語への世代的推移が看取される。

[17] 新聞定期購読者の割合は、1世：76.9%、2世：48.8%、3世：60.7%である。

も「まったく見ない」の回答がほとんどである。

(7) NHK短波ラジオ・日系ラジオの聴取についても世代差はなく（$\chi^2(2)=0.511$、n.s.）、どの世代でも「まったく聞かない」という回答が圧倒的に多い。

(8) 日本語の新聞購読については世代間で有意差が認められ（$\chi^2(2)=39.859$、$p<.01$）、多重比較の結果、購読の多い1世と購読の少ない2世・3世との間で世代差が認められた。

(9) ポルトガル語の新聞購読についても世代間で有意差が認められ（$\chi^2(2)=9.714$、$p<.01$）、多重比較の結果、購読の少ない1世と購読の多い2世・3世との間で有意差が認められた。

(10) 日本の歌を聞くかどうかについても世代間で有意差が認められ（$\chi^2(2)=12.225$、$p<.01$）、よく聞く1世とあまり聞かない2世・3世の間で世代差が認められた。

(11) カラオケに行くかどうかについては世代差が認められず（$\chi^2(2)=3.379$、n.s.）、どの世代でも「まったく行かない」の回答が最も多かった。

以上をまとめると、メディア・娯楽における言語使用で顕著な世代差が認められたのは、「日本のビデオの視聴」「新聞の購読」「日本の歌」で、日本・日本語志向の1世と、ブラジル・ポルトガル語志向の2世・3世との間で明らかな違いが見られた。

3.4 地域社会・職場における言語使用

地域社会・職場での言語使用については、次の4つの質問項目を設定し、選択肢（日本語のみ・日本語のほうが多い・日本語とポルトガル語が半々・ポルトガル語のほうが多い・ポルトガル語のみ）の中から選んでもらった。

(1) 地域の日系団体　(2) 宗教団体　(3) 日系人の友人　(4) 職場

3.4.1 地域の日系団体における言語使用

まず、地域の日系団体の集まりや会合への参加について尋ねたところ、1世：51.3%（20人）、2世：29.3%（12人）、3世：32.1%（9人）であり、1世に比べ、2世・3世では参加率が悪い。参加団体としては、文化協会・自治会・村会が最も多いが、そのほか1世では老人会や、俳句・短歌、カラオケ、ゲートボールなど趣味の会、2世では婦人会、3世では青年会参加者が多かった。

こうした地域の日系団体における言語使用について、世代別に見ると（表12参照。算出方法は表6と同じ。複数回答あり）、日本語中心の1世から、どちらかと言うと日本語の使用が多い2世を経て、ポルトガル語中心の3世へ移行する様子が見て取れる。

表12　地域日系団体における言語使用（人）

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
1世	25	3	0	1	29
2世	10	4	0	0	14
3世	1	1	8	0	10
合計	36	8	8	1	53

NR＝無回答

3.4.2 宗教団体における言語使用

まず、宗教団体での集会や活動への参加に

ついて尋ねたところ、１世：61.5%（24人）、２世：41.5%（17人）、３世：17.9%（５人）であり、世代が下がるにつれ参加率は低くなっている。

このような宗教団体の集会や活動での言語使用について、世代別に集計すると表13のようになる（算出方法は表６と同じ。複数回答あり）。表13より、日本語中心の１世から、日本語・ポルトガル語併用の２世、そしてポルトガル語中心の３世へという世代的推移を見ることができる。

表13　宗教団体における言語使用（人）

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
１世	22	1	0	3	26
２世	7	5	7	1	20
３世	0	1	5	0	6
合計	29	7	12	4	52

NR＝無回答

なお、帰属宗教（３．１．８参照）との関係で見ると、１世では宗教に関係なく日本語の使用が多いが、２世においては「仏教」では日本語、「カトリック」ではポルトガル語を使用するという回答が多く、３世では宗教に関係なくポルトガル語の使用が多くなる。

３．４．３　日系人の友人との言語使用

まず、友人の中に日系人が多いかどうか、選択肢（ほとんど日系人・日系人のほうが多い・日系人と非日系人が半々・非日系人のほうが多い・ほとんど非日系人・友人はいない）の中から選んでもらった。結果を表14に示す。１世では友人のほとんどが日系人であるのに対し、２世・３世では非日系人の占める割合が増えているが、３世であってもどちらかというと日系人の友人のほうが多い。

表14　日系人の友人の有無（人）

	ほとんど日系	日系多い	半々	非日系多い	ほとんど非日系	友人なし	NR	合計
１世	26	8	0	2	0	3	0	39
２世	15	6	7	5	6	2	0	41
３世	5	5	10	5	2	0	1	28
合計	46	19	17	9	0	5	1	108

NR＝無回答

次に日系人の友人との言語使用の結果を表15に示す（算出方法は表６と同じ。複数回答あり）。どの世代でも友人の数では日系人が多いにもかかわらず、そこでの言語使用は日本語中心の１世から、日本語・ポルトガル語併用の２世を経て、ポルトガル語中心の３世へと移行しており、世代的推移は非常に顕著であることが分かる。各言語使用の割合が世代によって異なるかどうかカイ２乗検定を行った結果、有意差が認められた（$\chi^2(4)=57.780$、$p<.01$）。

表15　日系人の友人との言語使用（人）

	日本語	半々	ポルトガル語	NR	合計
１世	32	4	1	2	39
２世	14	4	17	8	43
３世	0	1	26	1	28
合計	46	9	42	11	110

NR＝無回答

3．4．4 職場における言語使用

職業については前述（3．1．6）の通りであるが、職場で日本語あるいはポルトガル語を話すかどうか尋ねた結果を世代別に表16、17に示す。

表16　職場での日本語使用（人）

	話す	話さない	NR	合計
1世	27	5	7	39
2世	16	15	10	41
3世	10	14	4	28
合計	53	34	21	108

NR＝無回答

表17　職場でのポルトガル語使用（人）

	話す	話さない	NR	合計
1世	28	3	8	39
2世	27	2	12	41
3世	22	1	5	28
合計	77	6	25	108

NR＝無回答

職場での日本語使用については、「話す」が多い1世から両者半々の2世、日本語を「話さない」3世へという世代的推移を見ることができる。一方、職場でのポルトガル語使用では、世代を問わず「話す」の回答が多い。各言語使用の割合が世代によって異なるかどうかについてカイ2乗検定を行った結果、日本語使用では有意差が認められたが（$\chi^2(2)=12.259$、$p<.01$）、ポルトガル語使用では有意差はなかった（$\chi^2(2)=0.567$、n.s.）。

以上をまとめると、地域社会での言語使用においてはいずれも、日本語中心の1世から、日本語・ポルトガル語併用の2世へ、そしてポルトガル語中心の3世へという世代的推移見せるが、このような言語シフトの背景には、1世から2世、3世へと世代が若くなるにつれ、日系地域社会・宗教団体とのかかわりや日系人との交友関係がしだいに希薄になってきている事実があることも見逃すことはできない。また、地域社会において日本語中心の生活をする1世ですら、職場においてはポルトガル語を日常的に用いている。職場における言語使用においては、日本語とポルトガル語を併用する1世から、2世、3世へと徐々にポルトガル語へのほうへ言語使用の比重が移っていることから、「職場」はブラジル社会とのかかわりの強いドメインであると言うことができるだろう。

4．おわりに

以上、サンパウロ州近郊農村日系コミュニティであるスザノ市福博村における言語シフトについて、基本的属性および社会・経済・文化的属性に見られる世代差を踏まえつつ、ドメイン別言語使用の実態を世代的推移という観点から述べてきた。村の歴史が始まってから70余年、2世を中心メンバーとする1世から3世世代が営む地域コミュニティにおいて、どのドメインでも日本語からポルトガル語への言語シフトは3世でほぼ完了していると言うことができる。そして、日本・日本語的側面とブラジル・ポルトガル語的側面が混在してはいるが、世代という指標でもっ

て分析してみると顕著な差が認められ、日本的・日本語中心の1世とブラジル的・ポルトガル語中心の3世は対照的な関係にあり、その中間に位置する2世は日本的かつブラジル的であり、言語使用においては日本語・ポルトガル語を併用する傾向が強い。

各ドメインにおける日本語・ポルトガル語の言語選択に、世代が大きくかかわっていることは明らかにできたが、今後は世代以外の要因とのかかわりとともに、言語選択に世代差が生じる歴史的・社会的背景についても考察を深めていきたい。

参考文献

Fishman, Joshua A. (1965) Who Speaks What Language to Whom and When? *La Linguistique* 2, 67-88. (reprinted in Li Wei (ed.) (2000) *The Bilingualism Reader*. London : Routledge, 89-106.)

Fishman, Joshua A. (1967) Bilingualism with and without Diglossia ; Diglossia with and without Bilingualism. *Journal of Social Issues* 23 (2), 29-38. (reprinted in Li Wei (ed.) (2000) *The Bilingualism Reader*. London : Routledge, 81-88.)

Fishman, Joshua A. (1972) Domains and the Relationship between Micro- and Macrosociolinguistics. Gumperz, J. & Hymes, D. (ed.) *Directions in Sociolinguistics*. Oxford : Basil Blackwell Ltd., 435-453.

Weinreich, Uriel (1963) *Language in Contact : Findings and Problems*. The Hague : Mouton.

泉　靖一（1957）「ブラジルの日系コロニヤ」泉　靖一編著『移民 — ブラジル移民の実態調査 —』古今書院：9-127.

大野盛雄・宮崎信江（1956）「スザーノの日本人」『ブラジルにおける外國移民　とくに日本人の同化問題』サンパウロ日本文化協會：11-13.

大野盛雄・宮崎信江（1957）「大都市周辺農家の成立」泉　靖一編著『移民 — ブラジル移民の実態調査 —』古今書院：271-326.

工藤真由美編著（2003）「第1部　ブラジル日系社会と日本語」『大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」大阪大学大学院文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科2002・2003年度報告書第5巻：言語の接触と混交 — 日系ブラジル人の言語の諸相』：9-106.

工藤真由美編著（2004）「ブラジル日系社会言語調査報告」『大阪大学大学院文学研究科紀要』44-2

真田信治・庄司博史編（2005）『事典　日本の多言語社会』岩波書店

山東　功（2003）「ブラジル日系人の日本語への視点」『女子大文学　国文篇』54：36-54.

サンパウロ人文科学研究所（1989）『ブラジルに於ける日系人口調査報告書 — 1987・1988 —』サンパウロ人文科学研究所

サンパウロ人文科学研究所（2002）『日系社会実態調査報告書』サンパウロ人文科学研究所

中東靖恵（2005）「ブラジル日系・奥地農村地域における言語シフト — アリアンサ移住地における言語使用の世代的推移 —」『岡山大学文学部紀要』44：83-95.

中東靖恵・MELO, Leonardo A. de P.（2003）「ブラジル日系社会における言語の総合的研究へ向けて(1)」『岡山大学文学部紀要』39：67-82.

日本移民80年史編纂委員会（1991）『ブラジル日本移民80年史』ブラジル日本文化協会
ブラジル日系人実態調査委員会・鈴木悌一編（1964）『ブラジルの日本移民　記述篇』東京大学出版会
ブラジル日本商工会議所編（2005）『現代ブラジル事典』新評論
前山　隆（2001）『異文化接触とアイデンティティ ― ブラジル社会と日系人 ―』御茶の水書房
水野　一（2005）「多様化するブラジルの宗教」『ブラジル特報』2005年１月号、日本ブラジル中央協会
森　幸一（1995）「ブラジルからの日系人出稼ぎの特徴と推移」渡辺雅子編著『共同研究　出稼ぎ日系ブラジル人　上　論文篇［就労と生活］』（15章）明石書店：491-546.
森　幸一（2000）「還流型移住としての《デカセギ》― ブラジルからの日系人デカセギの15年 ―」森　廣正編著『国際労働力移動のグローバル化 ― 外国人定住と政策課題 ―』法政大学比較経済研究所：347-376.
森　幸一（2004）「ブラジル日系人の「日本語」を巡る状況と言説 ― 1908年から1980年代末まで ―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』44-２：123-161.
山田睦男編（1986）『概説ブラジル史』有斐閣